と神道文化 御製

三月十五日 (金) 二十五年 國學院大學 神社関係特別応接室



宮本誉士

[出席者]

著書に『御歌所と国学者』(平成二十三年 推進機構准教授。 後期修了。 昭和四十五年生まれ。 他論文多数。 0 博士 (神道学)。國學院大學研究開発 専門は近代日本思想史、 國學院大學大学院博士課程

国学。

昭和三十二年生まれ。

三宅守常

関係史。

主な著書に『維新期天皇祭祀の研究』

学部教授。専門は神道、皇室祭祀、

近代日本政教

後期修了。博士(神道学)。國學院大學神道文化

國學院大學大学院博士課程

了。 昭和二十三年生まれ。 錦正社)、他論文多数。 京文社)、『三条教則衍義書資料集』(平成十九年 著書に『無我愛哲学の基礎的研究』(平成元年 は臨床倫理、 (平成八年 博士 (宗教学)。 大明堂)、 明治宗教思想史、 日本大学医学部教授。 他論文多数。 日本大学大学院博士 日本思想史。 課程 主な 専門

事務局

學院大學兼任講師。

専門は神道教化論。

佐野和史 司

後期修了。瀬戸神社宮司・神社本庁教学委員・國昭和二十二年生まれ。國學院大學大学院博士課程

浅山雅司

昭和四十四年生まれ。 を経て現職。 學院大學日本文化研究所助手、 任講師。 神社本庁総合研究部研究課長・國學院大學兼四十四年生まれ。財団法人神道文化会事務局 國學院大學大学院博士課程満期退学。 神社本庁研修課長

-10-

談会は「御製と神道文化」というテーマにて企画をさせてい ただきまして、 今日は、 本当にありがとうございます。 大変お忙しい中、皆さんにお集ま 本日 の座

ただきました。

行っております。 にとり進めをお願いしました。その内容は、『神道文化』第 口博章先生にお越しいただき、 過去、 本会では、 國學院大學の岡野弘彦先生、 「和歌と日本文化」をテー 生田神社宮司の加藤隆久先生 甲南· マに座談会を 大学の濱

二号に掲載されています通り、和歌と日本文化の係りを始め、

歌論や歌風、 テーマを絞らさせていただきました。そのあたり、 であったと思います。 今回の座談会では、「御製」と言う言葉を冠し、 伝統文化の側面に至るまで、とても幅広いもの もう少し 事務局長

の方から具体的な趣旨の説明をさせていただきます。

時には独りで、 らの決意など多岐にわたり、 目に映る諸々の景色や身の上の様々な情景、 国において和歌を詠むことは古来より「敷島の道」とも呼ば 人のたしなみの一つとされてきました。 それでは、 時には歌会にて、 改めて趣旨のご説明を致します。 己の心を伝える手立てとして、 和歌が詠まれ披露されてき 時においては自 その題材は 我が

れ

知識

この伝統は、

現在でも宮中で行われる歌会始にも受

します。

事務局

折々に下される陛下の御製は、 け継がれています。 歌会始のみならず、 大御心を仰ぐ一つの形として、 行事の度、 四

広く国民の耳目を集めています。

こには当時の神への祈り、 は神事、祭礼など、 集』以降、神祇としての部立てもなされています。 万葉集以来、 また、和歌は、素戔嗚尊の八雲神詠にその源があるとされ、 神祇に関する和歌も数多く、 神社参拝に際しての歌でありますが、そ 祭祀の形をうかがい 勅撰 知ることが 『後拾遺和歌 その多く

や住吉明神は、その代表的な例として挙げられるでしょう。 下したり、 託宣を和歌にして下す神もおられます。 貴船明神

みならず神々も詠っています。

祈りを捧げる者の歌に返歌を

和歌は、

人の

きるものが数多くあるかと思います。さらに、

えてきたのでしょうか。 それでは、先人たちは神々の歌から何を読み取り、そして伝

さまざまな視点からのお話をお聞きできればと思います。 とした人々の心・心性、 何を読み取ろうとしてきたのか。 れが如何に読み取られたのか、 っと幅を広げ、 それでは、 今回の座談会では特に 佐野先生、 神祇歌、 また現代におけるその形について、 道歌などに詠まれた思い、そしてそ お取り進めの方、宜しくお願い 「御製」に注目しました。 わけても御製から先人たちが さらには、 大御心を伺おう またちょ いた



今、

歌と日本文化 た。 明 からの趣旨の説 拶、また事務局 松山先生のご挨 が 以前、「和 あ りま

感致しました。

と題して、 い内容を盛り込

開催されています。今回は「御製と神道文化」という少し絞 私なりの感想を申し上げて、 りますので、僭越ではありますが、今年の歌会始について、 本日は、 あるようにやはり幅広く、様々な切り口があるかと思います。 り込んだテーマを設定されたということですが、趣旨説明に ただければと思います。 お配りした「神社新報」にも「歌会始」の記事があ 話を進める切っ掛けにさせてい んでの座談会が

以前から皇后陛下も琉歌をお作りになられるなど、 び巡り行けば彼方恩納岳さやに立ちたり」と、 したお歌でありました。 今年の歌会始での御製を拝しますに、「万座毛に昔をしの 平成25年4月25日発売)にも特集があるそうですが 次の季刊誌『皇室』(第58号春号、 沖縄を題材と 両陛下

> 岳」を詠まれるということから、 備など様々な問題を抱えています。その状況において「恩納 本の国土の中において沖縄という地域は、 共々、沖縄を題材としたお歌を多く詠まれておられます。 の伝統というものが生きているのだということを、改めて実 御製には、 米軍の飛行機の配 いわば「国見 H

春野に立たす日近し」という御歌でした。この「天地 し来たれるもの」に、私は非常に感じるところがありました。 そして皇后陛下は「天地にきざし来たれるものありて君が

期待されておられる。そういうものを感じました。そして、 民共々、春の野に立つような、そういう新しい立ち上がりを 今のこの国が、本当にもう一度「天地のきざし」の下で、国 治的にも経済的にも、日本の国が大きな転換期にきている中、 になられるのだという想いを詠まれたものです。しかし、政 そして日の暖かくなった春の野に、健康を回復されてお立ち うのは、陛下が無事手術を終えられ、お体が回復されてきて、 しました。勿論、「天地にきざし来たれるものありて」とい そんなことも詠みこまれているのではないかという思いすら にあたります。まさに日本の国の生まれ変わりの年であると、 お詠みになった御歌であると存じますが、今年は御遷宮の年 二十年前の御遷宮で庭燎をご奉仕されたときの思いを込めて また召人をお務めになられた岡野弘彦先生の御歌は、 先生が

強さを感じました。
の歌の力強さは、「熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬののの力強さは、「熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなのぬないぬのは漕ぎ出でな」という額田王の歌にも通じるようなないぬのは漕ぎ出でな」という額田王の歌にも通じるようない。

私は特に和歌を学んだわけでもなく、座興で五七五を並べ私は特に和歌を学んだわけでもなく、座興で五七五を並べるだけで、本格的に歌を詠むわけではありません。歌の知識るだけで、本格的に歌を詠むわけではありません。歌の知識

ばと思います。

ます。では、宮本先生から、よろしくお願いします。の中から何か少し方向を絞って進めさせていただこうと思いれたことから、お一方ずつ、ご感想的なことから伺って、そがこれまで感じてこられたこと、あるいは研究なさってこら説明にもありましたように御製、御歌を中心として、皆様方説明にもありましたように御製、御歌を中心として、皆様方説明にもありましたように御製、御歌を中心としず、趣旨

究対象は今ほど佐野先生からお話しいただきました宮中歌会介をさせていただきますと、出身は山形県で、現在の主な研うぞよろしくお願い致します。まずはじめに、簡単な自己紹宮 本 國學院大學研究開発推進センターの宮本です。ど

歌と深く関わる御歌所のことを中心に発言させていただけ しております。 を支えた国学者・歌人たちの足跡について諸資料を基に検討 歌、 人たちです。 始における国民詠進制度の基礎を整備した宮内省御歌 ので、明治の歌会始のこと等も含めまして、 歌会始を掌った御歌所の制度的な面も含めまして、 特に明め 本日は 治期を対象としておりますが、 「御製と神道文化」というテーマです 明治 の御製・御 所 それ 0

ことも契機となり、御歌所における国学者・歌人たちの足跡御歌所長を務めた高崎正風の著作、それから文学御用掛を務めておりました国学者近藤芳樹の著作などを翻刻させていためておりました国学者近藤芳樹の著作などを翻刻させていためておりました国学者近藤芳樹の著作などを翻刻させていたの。こうした御歌所研究のきっかけとなりましたのは、初代のこうした御歌所研究のきっかけとなりましたのは、初代の

歌所を研究対象とする論文は数えるほどしか出ておりませんは連綿と続いていますが、近代における歌会始を所管した御た形での顕著な研究成果は長らく見ることができず、歌会始研究』が昭和十四年に出ておりますが、それ以降はまとまっ御歌所の研究につきましては、恒川平一先生の『御歌所の

に焦点を当てながら、

研究を進めてきた次第です。



安 (「唱歌の作歌と 八年)をはじめ、 波書店、 玉 らく第五巻 は、『和歌をひ が の和歌』 田 5 寬 平成十 近 年 生 帝 で

先生といった方たちの研究があり、 学論集』四五(二)、平成二十四年など)、さらには中澤伸弘 歌と〈政治〉:高崎正風を中心にして」『桃山学院大学社会 号、平成二十一年など)や松澤俊二先生(「明治期日本 鉄幹・子規による批判をめぐって―」『国文学攷』第二〇 八年など)、長福香菜先生(「明治期御歌所派歌壇の再検討 "奈良教育大学紀要』 第五十五巻第一号人文・社会、 軌を一にして私も研究を 平成十 'n 和

御

歌

所

人

脈

進めて参りました。

御歌所の研究、

もしくは旧派和歌の研究

は近年になってようやく盛んになりつつあると言えると思

また長福先生、松澤先生は文学の方面から研究を進め 私はそれを国学者の活動として捉えて、学統

近世からの繋がり、 ていますが、

たとえば高崎正風と薩摩国学との関わり

して、「一徳会」という組織を明治四十年前後に設立してい

0

という視点を中心として研究を進めております。 など、その学統を含めた近代における国学者と和歌の関係性 さらに、従来さほど注目されず、活動も明らかにされてい

でした。

しかし

用掛は、 始なども組織して、明治天皇の大御心に従って、 ていました。この文学御用掛に関わった人たちが同時に歌会 流した組織で、 御用掛の職掌のみならず、皇学御用掛の職掌が明治十年に合 書籍の編纂などにもかかわっていて、宮中和歌に関 たり、さらには『明治孝節録』『婦女鑑』『幼学綱要』などの なかった文学御用掛という組織にも注目しています。 の歌を国民詠進という形で実現させたのです。 るのですが、所属した国学者たちが事典の編纂事業に従事し 御歌所の前身となった組織として名前は知られてい 国学者・歌人のみならず漢学者なども所属 多くの人々 わる歌道

勅語の実践運動を推進する組織を結成するなどして、 Ŕ 道に関わる職掌のみとなった明治二十一年の御歌所成立以降 く国学者が関わる書籍編纂などの事業もあったのですが、 に教育事業をおこなっていたという事実があります。 もう一つ言えますのは、 高崎正風を中心とする御歌所のメンバーが参加して教育 文学御用掛の時代は歌だけではな

めた団体です。「一徳会」の機関誌には、明治天皇御製の謹組織した会)、心学の要素を取り入れて教育勅語の普及に努ける心学講舎の明倫舎・時習舎・修正舎の代表者が協議してとする修斉会と合併し(修斉会は、明治二十四年に京都にお本で、「一徳会」はその事業を受け継ぎつつ、京都を根拠地教育勅語の実践、善行を実践していくことを目標に掲げた団

「彰善会」といいますのは、褒章條令に基づきながら、

御製、

御歌、

か。そういう観点から、御歌所歌人の活動を見ていきますと、

女官の詠草などを指導するだけではなくて、歌

で推進したのかということも含めて、御歌所の組織を考える述べておりまして、御歌所長がこうした事業を如何なる理由高崎はこれらの教育事業を「一身をかけてもやり遂げる」と

解を高崎が毎号載せており、これも注目すべきところです。

必要があると考えています。

え方も同時に存在していて、御歌所においては、特に高崎は通り、和歌を通して人々の心を慰める、心を育むといった捉点も非常に重要ですが、高崎が重視した「古今集序」にあるいうまでもなく宮中の和歌を「雅」の世界として捉える観

やはり「教育」という要素を抜きにしては、御歌所の存在を

崎は と思います。 た捉 は、一通り皆さんからお話をいただいてから深めていきたいある 佐野 有難う御座います。また具体的なところについて

それを常に念頭においていたはずです。そういった意味で、 では次は、 武田先生にお願いします。

考えることはできないのではないだろうかと考える次第で 徳会」といった組織で進めていったのではないでしょう 高崎はそうした「教育」という要素を和歌にも 和歌では実現できないところを、「彰善会」や 昭和天皇の最後の御製が、 0 に富んだご意見を承りました。 武 御製は、 田 まさに「国見」「国褒め」 佐野先生から、 本年の歌会始の御製につい やはり 「国見」 「国褒め」 佐野先生のお説の のお歌だと思います。 のお歌 て示唆

なども含めて、近代における御製・御歌の受容につい

ていく視点も重要ではないかと考えている次第です。

治三十六年設立の大日本歌道奨励会という組織に顕著に見え

るのですが、当時の御歌所歌人達と地方歌人達との交流関係

必要があります。これは、

特に御歌所と関係の深かった、

眀

信奉する人たちが各地方にいたということにも着目していく

いえるわけです。そうしたことも考えあわせますと、

それを

とをふまえますと、

あり、御歌所歌人たちが教員を兼ねている場合も多かったこ道・書道の教育者として地域の人々とも交流していた足跡も

幅広い意味で教育活動に従事してい

空晴れてふりさけみれば那須岳はであったことが思い起こされます。それは次の御製です。

さやけくそびゆ高原のうへ

ています。 でしょう。陛下の沖縄に対する一入の思いが籠められごと」でしょう。陛下の沖縄に対する一入の思いが籠められ、先帝の御製と同様、陛下の御製も、沖縄の風土への「讃え

お歌ではないで后さまのお歌は、まさに新春にふさわしい「よみがえり」の新春は、一陽来復、新生と復活の季節にほかなりません。皇それがすくすくと萌え上がってゆくさまが語られています。では、天地のはじめの際、葦の芽のごとき命の兆しが芽生え、では、天地のはじめの際、葦の芽のことき命の兆しが芽生え、では、天地のはじめの際、葦のお歌も、『古事記』における天地初発のまた、皇后さまのお歌も、『古事記』における天地初発の

ここには、

陛下

されたのです。

皇后さまの思いが託されているのではないでしょうか。のご回復を予祝し、さらに国全体の「新生」をも祈念ずる、

先ほど、宮本先生から、和歌文学の研究者としての専門的先ほど、宮本先生から、和歌文学の研究者としての専門的先ほど、宮本先生から、和歌文学の研究者としての専門的先ほど、宮本先生から、和歌文学の研究者としての専門的先ほど、宮本先生から、和歌文学の研究者としての専門的

す。それを須佐之男命が台無しにしたのが「天つ罪」の起源す。それを須佐之男命が台無しにしたのが「天つ罪」の起源として受け継がれていることがわかるのはないでしょうか。として受け継がれていることがわかるのはないでしょうか。として受け継がれていることがわかるのはないでしょうか。として受け継がれていることがわかるのはないでしょうか。として受け継がれていることがわかるのはないでしょうか。として受け継がれていることがわかるのはないでしょうか。そもそも歌のおこり、祭りのおこりは、神道古典の中では、正の事を見ても、「祭り」と「歌」が、皇室の大切な営みとして受け継がれていることがわかるのはないでします。これにに当時では、年貢に際して、陛下は元旦の四方拝・歳旦祭、さらよれば、年頭に際して、陛下は元旦の四方拝・歳旦祭、さらよれば、年頭に際して、と「歌」がは、年前に、大田の一月十四日号があります。これにお手許に「神社新報」の一月十四日号があります。これにお手許に「神社新報」の一月十四日号があります。これにお手許に「神社新報」の一月十四日号があります。これにお手許に「神社新報」の起源

第を伝えています。いずれも祭りの起こりを語る伝承でし命の源である光明が甦り、天上の秩序もまた甦るに至った次られた天照大神の「よみがえり」の祭りを行い、一陽来復、でした。また有名な天の岩戸の伝承も、岩戸にお籠もりにな

遠理命が、幽冥境を隔ててお互いの思いを伝え合った次の恵等名な言及があります。すなわち、やまと歌の端緒は、伊弉著名な言及があります。すなわち、やまと歌の端緒は、伊弉書とは、「八雲の道」の起こりを、この素戔嗚尊の「あなにやしえをとめを」「あなにやしえをとこを」(古事記)の言葉の交わし合い始まります。ついで素戔嗚尊は、櫛名田比売との聖婚に際して、「八雲立つ出で素戔嗚尊は、櫛名田比売との聖婚に際して、「八雲立つ出で素戔嗚尊は、櫛名田比売との聖婚に際して、「八雲立つ出で素戔嗚尊は、櫛名田比売との東近にでして、「本のでしょうか。これについては、紀貫之『古今集』仮名序ののでしょうか。これについては、紀貫之『古今集』仮名序のでしょうか。これについては、紀貫之『古今集』仮名序のでしょうか。

赤玉は緒さえ光れど白玉の

相聞のお歌です。

君が装いし貴くありけり

沖つ鳥鴨著く島に我が率寝し

妹は忘れじ世のことごとに

神代の大尾を飾るにふさわしい、神秘的にして感銘深いお

るのです。

私どもは、『古事記』

のいのしえに立ち反って、

歌ではないでしょうか

自ら見染められた伊須気余理比売と結ばれたのち姉さん格のあの子がほしい、と答えられました。神武天皇は、は「かつがつもいや前立てる兄をし娶かむ」―前列に佇むおを七行く媛女ども誰をし娶かむ」と問いかけると、神武天皇お見合いをセッティングします。大久米命が「倭の高佐士野お見合いをセッティングします。大久米命が「倭の高佐士野お見染められた伊須気余理比売のまれました。まず大久米命が、神武天皇も、御成婚に際して歌を詠人の代に入って、初代神武天皇も、御成婚に際して歌を詠

葦原のしけしき小屋に菅畳

事記』では、神武天皇の妃、伊須気余理比売が、多芸志美々うか。そしてそのことは、皇后においても同じでした。『古皇の使命を、身をもってお示しになられたのではないでしょやまと歌を詠い言霊の力をもって天地人心を和らげるべき天

と詠われます。こうして神武天皇は、初代の天皇として、

いや清敷きて我が二人寝

の謀反に際して

狭井河よ雲立ち渡り畝傍山

と歌われ、言霊の力を用いて、皇子に危急を知らせたこと木の葉さやぎぬ風吹かむとす

ほど左様に、皇室のやまと歌の伝統の淵源は、神代の昔に遡皇も皇后も、身をもってやまと歌を詠まれてきました。ことが伝えられています。このように、初代天皇の時代から、天を歌れれ、言霊の力を用いて、皇子に危急を知らせたこと

について、 我が国の、「祭りの国」「和歌の国」としての国柄の成り立ち 思いをひそめなければならないのではないでし

佐 では次に、三宅先生、 お願いします。

Ξ たのか、先月の入学試験では、受験生がかなり増えて、ちょ り大きな声では言えませんが、 が、その手術の執刀医が私どもの医学部の出身者でした。 義などを担当しています。昨年、陛下が手術をなされました お願いいたします。医学部で医療倫理、生命倫理に関する講 した出来事でした。 もそういうことがステータスになるんだということを再確認 っと大変な状況になりました。 宅 日本大学の三宅守常と申します。どうぞよろしく やはり医学という業界の中で 知名度というか人気が高まっ

得手、不得意の方に引っ張られて、気がついたらその中にど 思っていたんです。しかし人生というのは面白いもので、不 歌道論とか、歌論とか、国文学の領域や和歌も全然駄目だと っぷりかかわっているという状況です。 ていました。歴史は好きだったんですが文学は不得手でして、 実は私、昔から歌は得意ではなく、縁が無いだろうと思っ

今日の座談会の核心の部分は御製、 あるいは御歌というと



説明でもありま 思います。趣旨 歌を詠むという 視点もあるかと して、庶民が和 こから少し派生 ころですが、 したように、 そ

と武田先生にお願いしまして、私は時々、 ます。ですから、 私の役目は「道歌」の紹介とその内容ではないかと思ってい 育 は、道歌というものを有効的に活用して、通俗倫理の庶民教 歴史的に実績があったのは江戸期の石門心学です。石門心学 ない、扱われなくてはならない存在です。この道歌の方面で、 ての歌、つまり、道歌というものも当然語られなくてはなら 立場からの「釈教歌」や「南無歌」も含めた、心の学びとし ます。神道文化だけではなくて日本文化全体の中で、仏教の してまいります。 の研究に携わってきた経験がありますので、おそらく今日の いわゆる教化、 話の中心の御製と御歌の方面は、宮本先生 普及に功績がありました。 横から少し口を出 れるものがあり 「道歌」と言わ 私は石門心学

-18-

私は、 頃は、 所属しまして、 ものは何だろうと考えていました。 ある教育勅語衍義書等を中心に研究活動をしていたのです れましたが、鎌田純一先生の下で研究活動をしていました。 立大学におられます佐藤眞人先生の二人と私は神道研究室に そこに研究員として一時期かかわったことがあります。その とは仏教学の出身です。これにはいろいろと経緯がありまし ころに所属していて、 で、今度は近世に入ろうという状況でした。ところが、私は 実はそれ以前に、私は日本大学の教育制度研究所というと その頃は、時代を区切っての研究で、中世が終わったの 横浜に大倉精神文化研究所というところがありまして、 .の研究をそれまで全くやったことがなく、近世で出 本来、 国士舘大学に行かれました藤森馨先生、今、北九州私 近代の宗教史、 のちに國學院大學からは岡田莊司先生が入ら 私が入ったときにはもうお亡くなりに 特に教育勅語に関する解説書で

を研究していたわけではありませんでした。

私自身、もとも

心学の研究に携わったと申しましたが、もとから心学

誉教授で印度哲学科の主任教授を退官された方でしたが、そ 化研究所の所長をお勤めになっておられまして、 ろう」ということになり、当時、早島鏡正先生が大倉精神文 これは面白いということになったのです。 読んでみようかということになり、次第に石門心学会に係わ 何箱もの段ボールを私の研究室に持って来て、ならば少しは 究するから一括して借り受けるということになったのです。 りになってしまうような状況にありました。そこで、 るんだという問題が起きてきまして、放っておくと、 史料を集めておられまして、教育制度研究所にはかなりの量 生は和装本の写本等を中心に、 門心学に本格的にかかわるようになっていきました。石川先 いわゆる雑 が、石門心学会の雑誌の校正や原稿依頼、 の早島所長が、「三宅は道歌をやれ、心学でも道歌をやれ っていった状況とも相俟って、和装本を読み進めていく内に、 の和装本の史料がありました。そういった史料を誰が管理 話が前後しますが、大倉精神文化研究所で「石門」 用を仰せつかり、 またいくつかの経緯を経 かなり貴重な石門心学関連 校正、 東京大学名 発送とか、

はあるのですが、心学の教授法の中に、庶民教育のなかでも方面、また思想史畑とか倫理学畑からの視点では研究の蓄積石門心学については、経済史の方面、神道の方面、仏教の

というような感じで、後押しをしてくださいました

先生は、『石門心学史の研究』で学士院恩賜賞、『古往来につ

なっていましたが、石川謙という先生がおられました。

石川

家と言われる先生でした。そんなこともありまして、

いての研究』で学士院賞を取られた、

いわゆる石門心学の大

それま

で心学といったものに全く係わったことはなかったんです

ますが決して多くなく、さらにまとまったものはほとんど見 認識されていたのですが、 非常に有効であった、メソッドの一つが道歌であったことは 道歌に関する研究は、 若干はあり

ので、 うなら、視聴覚教育ではないかと思います。 それを文字に書いてどこかに張っておけば、 られませんでした。教育制度研究所にいたものですから、 の教授法には非常に惹かれました。 口に出して耳で聞き取るので、まさに聴覚教育ですし、 道歌の活用は、今風に言 道歌は和歌です 視覚教育となり

易く端的に、そして短くて、口ずさみやすくて、覚えやすい、 身の行いにもつながっていくのです。そういう意味で、道歌 れが耳に残り、記憶に残り、そして、それがしだいに自分の 小さい子供でも繰り返し繰り返し口ずさむことができる。そ 難しい理論だと誰もなかなか覚えませんが、三十一文字なら 涯のなど難しい部分を、三十一文字にギュッと凝縮し、判り であるという論考をいくつか書いてきました。 内容は、こころのあり方などを中心に幅広く、また心の境 教育方法として、当時としては先進的なもの

今日の話題は、 自己紹介を兼ねながら、 「道歌」を紹介しろという意味で呼ばれたのだと思い 御製を中心とするけれども、 まず前提としてお話申し上げま その周辺とし ま

> 一つの流れのようなものが見えてきたような気がします。 野 有難う御座いました。お三方にお話を伺いまして、

佐

うかと思います。 現代の我々がどう考えていくのか。このあたりが焦点になろ 近代のご専門の方が多いので、そのあたりの状況と、それ そして御製や和歌を取り巻く近世・近代の状況、特に今日は えるかもしれませんが、和歌が果たしている役割について。 ゆる庶民と和歌のつながりや、 その御製や御歌と国民がどのように関係してきたのか。 今回の趣旨では、御製、 御歌を中心に据えておりますが 道歌を含めて国民教化とも言

の問題なども含めて、 とをつなぐシステムの一つだと思いますし、教育勅語 ただければと思います。近代における御歌所の役割にしても、 御歌所も含めて、御製と国民とのを結びつける制度やシステ いわば和歌を通じた国民教化といいましょうか、皇室と国民 ムの歴史などのお話をもう一度、お三方に、改めてご指摘い 取っ掛かりとしまして、 お話をいただければと思い 御製というもののあり方、 ・ます。 の理 そして

者の一人でして、『後鳥羽院』(筑摩書房・日本詩人選10 日本中、 製がそのまま県民の歌になってい 山形にしかないと思います。私は、 います。 こういう県民 丸谷才一の愛読 昭

ご出身と伺いました。

山形県民歌は、昭和天皇の最上川

ちょっと話は外れるかもしれませんが、宮本先生は

Ш の御 形

とを記憶しています。 中で古今集にある詠み人しらずの歌と昭 和 の二つが最上川を詠んだ和歌の中では最高だと評価していた 48 その 他 の歌論書や対談集をいくつか読みました。 和 天皇の御製と、 その

そ

う時代の中で、どんな働きをしていたかなどをもう少し詳し くお話いただければと思います。 について、近代的な社会システムの整備がなされた明治とい それと御歌所についてですが、 社会的な国民とのつなが 'n

新年歌会始の際に詠まれた「広き野をながれゆけども最 宮 確かに昭和天皇が皇太子であられた大正十五年の 上川

う話です。

すね。 うみに入るまでにごらざりけり」が、そのまま山形県民 表すものになっています。 います。 になっていて、山形県民にとって、 ほど佐野先生からお話しのあった丸谷才一さんも山形出身で で選者を務めたアララギ派 県の山を表すと同時に最上川の流れをシンボルとして ちなみに、 昭和天皇が昭和二十二年八月、東北六県巡幸の 山 [形県旗・山形県章となっているデザイ さらにいえば、 の歌人斎藤茂吉も山形出 有難い誇るべき歌だと思 戦後の宮中歌会始 身で、 の歌

折に山

[形県の上ノ山温泉にお泊まりになった際、

茂吉にお会

とどこほ

記録としても、

貴重な資料となっています。

こうした地域性といいますか、

昔から言われている東京

いになり、

茂吉は

「最上川流れさやけみ時の間も

ることなかりけるかも」と詠んで、

とどこおることがないと

たといいます。 いうところも最上 一川として大切であるということを申し上げ

とは・・・・・」 月ばかり」といふ歌ですが、茂吉は医者でもあり、「この月 す。 佐 られる陛下はすぐうなづかれて、茂吉と意気投合されたとい いうのは 茂吉の御進講のことを話題にしています。 野 「最上川のぼればくだる稲船のいなにはあらずこの をドイツ語で説明されたところ、 確か丸谷と岡野先生との対談であったと思

は 歌を集録した、 明治九年の東北・北海道巡幸の際に沿道の人々が献上した詩 かく吸ひ込む」)、 んの詠進歌「安達太良の馬の背に立ちはつ秋の空の青さをふ 始にも東北からの詠進歌が選歌に一首 けに絞っても東北出 合直文・石川啄木・佐藤佐太郎など、近代以降の著名歌人だ 宮 当時の東北の人々の歌が数多く載せてあり、 本 話はさらに転じますと、斎藤茂吉のみならず、落 高崎正 佳作に四首、 身の歌人は数多くいますし、 嵐編 『埋木廼花』(明治九年九月)に 選ばれています。ちなみに、 (福島県・金澤憲仁さ 今年 巡幸の -の歌会

所の歌人たち、 道御用掛が設けられ、 言われ 近代以降の歌会始における国民詠進制度を整備 民詠進の実際を分析していく必要があると思いますが 人たちであったわけです。 名古屋からの詠進歌が多いという事実なども含めまして、 ます通り、 正確にいえばその前身である歌道御用掛 明治天皇の和歌への強い思いがあって、 御歌所が出来たのでありまして、 もちろん、「陛下の 御歌 したの 所 ~、この が 詠進 とも 御 0 歌 歌 歌 玉

制度整

の背景には明

治天皇の大御心があったことはいうま

て、

でもありません

ぼることができるという説もあり、 地下歌人が歌を学んだり交流したりして、それを庶民に伝え 始こそ現在の歌会始の直接の起源であるとする説も なったことを画期として、文亀二年(一五○二)の和歌 だけに披講を行うことによって年始にふさわしい正 歌御会始の起源につきましては、 また、近世までは和歌の権威が宮中にあり、堂上歌 、くという流れもありました。たとえば、 鎌倉時代中期までさか 酒井信彦氏のように 冷泉為村の門 月行事と あ りま 人に 御 正 芦 人 会 0

川章尹や有賀長因に添削を受けるなど、特に近世前期は堂上

ても堂上歌人に歌を学ぶということがありました。

歌御会始の起源につきましてはひとまず置いて

ちろんそうですが

明治十二年の

般からの詠進歌が陛下

萩原宗固

・小沢蘆庵があり、

本居宣長は為村

0

門人森

が優位

の情勢に

あり、

地下歌壇はその影響下にあ

Ď,

幕末

ここでは、

官吏たちが詠進の機会を与えられ、 らと考えてよいだろうと思います。 て宮中と庶民が直につながる形になったのは、 中に限られた歌会であったことを確認すれ 七年には一般の人々も誰でも詠進が出来るようになったわ なったわけです。 れませんでしたが、 おくとしても、 これは画期的な改革でありました。 当時の官吏たちも歌を詠進するようになり、 幕末までずっと連綿と続いてい 従来の堂上歌人、 明治二年 ·の歌会始 お公家さんだけではなく 歌会始に参加することに 明治 気からは、 元年は歌会始が行 ば 明治新i 歌会始 やはり明 た御会始 さらに明治 政 府

年には、 講する制度ができます。 改めて思い起こす必要があると思います。 点となった国民の教育に資するものという考え方は、 まる契機となったのです。 非常にいいのではないかと明治六年に建言し、 なく広く衆庶に歌の詠進を許可したならば、 した。この下澤が、 の福羽美静が受け取り、 ましたのは、 この明 治 般の詠 七年からの国民詠進制度が定められる起点となり 青森の国学者・下沢保躬という人物の建白書で 進歌のうち特に優 一部の官吏などの限られた人々だけでは 明治七年の歌会始から国民詠 明治七年の一 こうした国 れたものを選歌として披 般からの 民詠進制度の当 さらに、 玉 それを国学者 泳進 [民の教育上も 開 明 今一度 始はも 治十二 初 進

御歌 会始の の根幹 その後、 内府に歌会始詠進歌委員会が新設されて事務を継承 始が続きまして今日に至っています。しかし昭和二十一年に を始め 図書寮歌詠課に事務が引き継がれ、 昭和十九年、二十年も続けられています。 表され詠進歌が募集されるようになりました。 前 の組織改編によって図書寮歌詠課が廃止され、 二年の選歌の制は、 報にも掲載されるようになりました。ちなみに、この明治・ そのような形で歌会始は、 新が 歌会始 -を確立したとされています。 講されるようになったことが現在の国民参加 廃止され、 歌 が 「和三十七年に宮内庁歌会始委員会となり、 新聞 の選歌も新聞に発表されるようになり、 に掲載されるようになり、 それまでの 高崎正風が提案したと言われています。 ずっと続きまして、 御歌所の事務は一 また明治 昭和二十二年には宮内府 そして戦後も歌会 治八年頃 新聞で勅題が発 そして、 同年九月に宮 旦 戦争末期 には 0 宮内府 主管部 歌会始 後に官 更に 御製 歌 0

> が選ばれるようになってきた」とあります。 れた方々でしたが、この頃から、 た。長い間、 菊葉文化協会編 うなお題が選ばれるようになったと、 ように、 べてらっしゃいます。天皇陛下御即位二十年記念出版 平明で誰でも詠めるというお題の効果が出始めてきまし 北海道から沖縄に至るまで同じ感覚で歌が 預選者の顔ぶれは終戦当時に青年時代を過ごさ 『平成の宮中歌会始』には、 若い世 歌人の木俣修さんが述 代 .の方の詠まれた歌 「平成十年頃か 詠 0) めるよ 財

5,

桂園 今もなお続いていると思います。 特に近代以降は、 歌 首を超える詠進歌が集まったようですが、 人中心であったところに、 であったと仰っていますが、いつの時代でも宮中の方たちは、 しているようです。歌風も、 九首ですね。 により一万首台にまで減少しています。 んだり、 いったとされています。 風 戦前で詠進歌が一番多かった時期は昭和十六年で四 派歌人たちから歌や語法を学び、 1/2 独学で学び取っていくようなお姿があって、 わゆる旧派 近年は、 その時 の歌風から徐々に新 大体二万首から二万首弱ぐらい 歌人の木俣修さんはそれがよいこと 々のお歌の権威とされる歌人から学 歌道御用掛として入った国学者 昭和二十二年以降は、 近代以降、それまで堂上歌 そして和歌を詠 ことしは一八、 派の歌風に変わって 昭和二十年の終戦 御歌所 それは で推移 万六千 ってき

短くて簡単で、

誰でも読めるような、 一詠進を求めるために、

そして地域差がでない

たという流れがありました。

こうした流れの起点に明治天皇

さらに広く一

般の

藤茂吉・佐佐木信綱

窪田空穂)

が選ばれました。

そし

昭

和二十二年以降

次)、三人は民間といいますか、

その当時の著名な歌人(斎

鳥野幸

人のうち二人は御歌所に勤めていた歌人(千葉胤明

されてすぐの昭和二十二年

'n

歌会始におきましては、

選者五

局は式部職と定められて今日に至っています。

御歌所が廃

止

と考えられると思います。 の中から、 の大御心があり、 戦後の新派歌人に学ぶという姿勢に繋がっている 御歌所歌人の活躍があり、そういった流 n

制度的な変遷とその役割などについて、お話していただきま 佐 宮本先生に、 歌会始を取り仕切ってきた御歌 新の

ています。

した。 響しているんですね。また歌を詠む、歌を学ぶことについて 下沢保躬や福羽美静、 の国学者の係りについてもお話があったと思います。 歌会始が、我々の知っている現在の形になったのは、 高崎正風などの国学者の考え大きく影

ます。 りなどについて、 こうした近代の流れについて、また国学者の和歌 武田先生の方からお話を伺えればと思 の関 わ

武 さえると共に、近代の前史としての近世の歴史の実態を、 つかり押さえることが必要だと思います。 Ħ 近代の問題を研究するためには、 古典の原点を押

ないでしょうか。 況に立ち至ったのは、いったいいつごろからなのでしょうか。 の者が詠歌に親しむ、といようなことは余りなかったのでは 私ども庶民が、和歌を詠み、道歌に親しむ。そのような状 やはり江戸時代からだと思います。 歌道の大衆化は、 江戸時代に起きた文化現 江戸以前、下々

象だと思っています。

復興をも念願され続けてこられたことに淵源するものと考え 代が、歌道振興に熱心でいらっしゃったこと、さらに祭りの でしょうか。それは端的に、 それでは江戸期において、 戦国から江戸初期にかけての歴 なぜ歌道はかくも大衆化 した

ったのです。 式年遷宮等々、 勅撰和歌集編纂も途絶え、さらに祈年祭や新嘗祭、大嘗祭や の渦中で、ほとんど失われてしまいます。『古今集』以 主」でもありました。しかしそのお立場は、 古来、天皇は「やまと歌の王」であり、「五穀豊穣 諸々のお祭りもそのほとんどが廃絶してしま 中世以降 0 0 動乱

イバルのみならず、次代のリバイバルに向けて、 そういうどん底のような状況の只中で、歴代は、 燭の火を頼りに細々と暮らしておられたと伝えられています。 開してしまいました。 ねました。そのリバイバ 都は兵乱のため焦土と化し、お公家さんも殆どが地方に疎 破れ築地の内裏の中で、 ル戦略の柱が、「和歌の道の復興」、 みかどは、 ご精進を重 当面 田のサバ

れ以来、 のは、 酒井信彦先生によれば、 戦国動乱の直前、 歴代天皇は、 歌道の復興・ 後柏原天皇の御世のことでした。そ 日本古典の復興を、 心掛

「祭りの復興」、ということにあったのではないでしょうか。

今につながる歌会始の形が整った

書紀神代巻」を印刷刊行し、以て全国に頒布、日本古典の学陽成天皇は、それまで筆写本で細々と伝えられてきた「日本けてこられたのです。例えば、桃山時代に御位を守られた後

よって、宮中において、歌道の振興・古典学の興隆という事代の初頭、とりわけ後水尾天皇、さらに霊元天皇の御尽力にした。また「百人一首」『伊勢物語』『源氏物語』などを率先興を期し、皇族はじめ廷臣らを、スパルタ教育で鍛え上げま興。の刊行です。続く後水尾天皇は、王朝盛時の宮廷歌壇復巻』の刊行です。続く後水尾天皇は、王朝盛時の宮廷歌壇復

後水尾天皇は、

態が齎されたのです。

百敷や松のおもはんことのはの

拝することができます。また霊元天皇の御製、と詠われました。天皇の歌道復興への天皇の切なるお気持をと詠われました。天皇の歌道復興への天皇の切なるお気持を

況が開かれていったのです。

伝へゆくしるべは神のしるしにて

いいには、欠値が然れないによっています。すえたのもしき敷島の道

しっかりと作り上げられ、和歌の道が盛んになっていった代初期、後水尾天皇・霊元天皇の努力によって、宮廷歌壇がことを熱願するお気持ちが示されています。こうして江戸時にも、神の御心のままに、歌道が愈々盛んになっていくべき

のです。

世社会の各層に及んでいったのではないでしょうか。しかし、その文化的・精神的影響は、深い所でじわじわと近しもダイレクトに全国に及んでいったわけではありません。出られなかったのです。ですから宮廷での歌道再興が、必ずにありました。天皇はご在位中、原則として御所から一歩もしかしこの当時、天皇はほとんど市井から隔離された状態しかしこの当時、天皇はほとんど市井から隔離された状態

背景として、庶民も和歌に親しみ和歌を詠む、という時代状期以降、盛んになっていきました。宮中の和歌文化の興隆を親しみ、暮らしの折節に歌を詠むという文化が、江戸時代中壮の詞華集に纏めたものです。こうして庶民が和歌の道には、百姓町人はじめ庶民のあらゆる階級の和歌を集めて、二は、百姓町人はじめ庶民のあらゆる階級の和歌を集めて、二は、百姓町人はじめ庶民のあらいうできる。この歌集

冒頭は次の天智天皇の御製です。
一首」は藤原定家の撰によるものと伝えられています。その一首」は藤原定家の撰によるものと伝えられています。そのもなく「百人一首」です。「百人一首」は、歌詠の雛形としもなく「百人一首」です。「百人一首」は、歌詠の雛形としるの中で、歌カルタとして広く親しまれたのが、いうまで

秋の田のかりほの庵の苫をあらみ

「百人一首」の二首目は持統天皇の御製です。

春すぎて夏きにけらし白妙の衣ほすてふ天の香久山

「百人一首」冒頭の二首は、まさに古代朝廷盛期の御製でではないかと考えています。天智天皇御製は、あるいは新嘗の祭りの心を詠じた歌ではないかと受けとめています。その歌意は、夜露に濡れながはないでしょうか。あるいは、の苦労に思いを寄せるものですが、ら脱穀を行うお百姓さんの苦労に思いを寄せるものですが、ら脱穀を行うお百姓さんの苦労に思いを寄せるものですが、ら脱穀を行うお百姓さんの苦労に思いを寄せるものですが、られている天皇のイメージが、暗々裏に浸透していったの祭りの心を詠じた歌です。下智大皇御製は、あるいは新嘗の祭りの心を詠じた歌ではないかと考えています。

島に流された後鳥羽上皇の次の御製です。お歌で締めくくられています。うしろから二首目が、隠岐のお歌で締めくくられています。うしろから二首目が、隠岐の「百人一首」は、鎌倉時代に島流しにされたお二方の帝の

人もをし人も恨めしあぢきなく

す。 百首の締めくくりが、佐渡島に配流された順徳上皇の御製

世を思ふゆゑに物思ふ身は

だきました。

ももしきや古き軒端のしのぶにも

なほあまりある昔なりけり

ます。さても「百人一首」は一見するところ、王朝の雅びをいずれも古代王朝の没落、天皇の御無念を伝えて余りあり

暗号として、暗々裏に作用するところがあったのではないで教えているようで、実は王政復興の起爆剤、その秘められた

しょうか。

あらためて考え直していきたいと思っています。と歌は、天皇を中心に国民を纏めてゆく上で、一種政治文化的な、文化統合的な役割をも果たした、ということも言えるのではないでしょうか。近代の歌人は、明治聖代を、『万るのではないでしょうか。近代の歌人は、明治聖代を、『万るのではないでしょうか。近代の歌人は、明治聖代を、『万るのではないでしょうか。近代の歌人は、明治聖代を、『万と歌は、天皇を中心に国民を纏めてゆく上で、一種政治文まと歌は、天皇を中心に国民を纏めていますが、や一般的には、文化と政治は別物と考えられていますが、や一般的には、文化と政治は別物と考えられていますが、や

で行われたのではないかという、非常に大切なご指摘をいたという視点から、近世に祭りの復興とやまと歌の復興が一対の川柳がありますが、今、武田先生から「百人一首」の普及佐 野 「智で始め徳でおさめる小倉山」という江戸時代

であり、この戦後のどさくさに紛れてやるものではないとい中で、教典をつくるということは天皇陛下でもできないこと「神社新報」に反対の立場から論文を書かれています。そのがありました。そのことについて葦津先生は昭和二十二年のが私りました。そのことについて葦津先生は昭和二十二年のが私事

う趣旨のことを述べておられます。

と「文学」に係るものだけでした。歴史としては「六国史」、天皇陛下がかつて勅命で編纂を命じられたものは「歴史」

文学の方面としては「和歌集」があります。

まで二十一の勅撰和歌集が編纂され「二十一代集」と呼ばれ藤原定家の「新古今」の後も編纂され、中世の混乱期に至る「和歌集」の編纂は、古今・後撰・拾遺の「三代集」を経て、「六国史」の編纂は平安半ばで終わってしまいましたが、

ています。この最後が『新続古今和歌集』で後花園天皇

土の御

っています。

ったか、そこに一つの視座もあるのかもしれません。象徴的の式年遷宮も行われています。「二十一代集」以降も、和歌の式年遷宮も行われています。「二十一代集」以降も、和歌の式年遷宮も行われています。「二十一代集」以降も、和歌と歌の復興ということに対する熱意というものは、ずっと継と歌の復興ということに対する熱意というものは、ずっと継と歌の復興ということに対する熱意というものは、ずっと継と歌の復興ということに対する人に関連の永享十一年(一四三九)の成立とされています。後花園世の永享十一年(一四三九)の成立とされています。後花園

ます。

とになろうと思います。で、国学者たちのそれを庶民に広げる活動があったというこ一対となって庶民をはじめ社会に広がっていく。当然、そこ

現実に神社の宮司の立場から言いますと、

あちこちの神社

に「百人一首」というもので、祭りの復興と歌というものが

言うか、私家歌集というものもできてきたのではなかとと思ような、何首も何首も重ねて詠んでいくという形の和歌集とものもつくられていったし、国学者の宣長の『玉鉾百首』の広い意味での和歌が広まっていった。その中で道歌といった額とか、いろいろなものも見受けられます。それだけ庶民に紅戸時代の和歌に関する碑が建てられています。そしていに江戸時代の和歌に関する碑が建てられています。そしてい

浸透状況も含めて、三宅先生からもお話を伺えたらと思い広がり、「百人一首」や石門心学の歌、道歌のようなもののそれではそう言ったことも踏まえつつ、和歌の庶民層への

ましたが、まさにその通りだと思います。 期以降くらいから始まるのではないかと武田先生は指摘されル、生活の中で和歌を詠む、こういったことはやはり江戸中三 宅 今、庶民の和歌を詠む習慣、そういう生活スタイ

は毬打ちであるとかの特定の技能者、その道の歌という傾向が意識されていたようです。例えば、鷹匠であるとか、あと町期頃ですと「道」というと、特定の技能・技術ということですが、これには時代的変遷があります。江戸時代以前、室いわゆる道歌と言われる「道」をどう捉えるかということ

があったようです。ところが、 というか、生活維持というか、人々とのかかわりの中での日 定してきた江戸時代になると、 「道」ではなくて、日常の生活の道、つまり道徳性・倫理性 道歌の 戦乱の時代を経て世の中が 「道」は特定の技能 安 0 から、

神道の三社託宣と連結して石門心学者が、正直、慈悲や誠と 時代とともに道歌というものの定義もだんだん変わってきて いるということになると思います。そしてそういった部分が、 いうように、道という概念が変化してきます。そう考えると、 倹約であるとか、誠実であるとかいうような徳目が大事だと

常生活教訓的なとらえ方になってきます。正直であるとか、

というか種類というか、そのあたりの問題もあります。たし かの徳目を広く敷衍させていくということになります。 道歌とはなんなのか、バリエーションというか分野

ないと思います。それじゃあ、 その人の心のありようを示しているという意味を持ち、 その人の精神的境涯を吐露している限りにおいては るのか、あるいはそうでないのか。単に花鳥風月を愛でてい れも人によって考え方はまちまちです。どこまでを道歌とす かに三十一文字の和歌、 になるじゃないかという議論も一部にはあるわけです。 る和歌があるとします。でも待てよ、花鳥風月を愛でた心も、 きれいだな」というイメージだけのことではなくて、 これは基本であることは誰も否定し それだけなのかというと、 単に 道歌

あります。

道歌にはそういう側面があることは事実です。

調の「いろは歌」や「子守歌」、人と人が仲よくなれ 中でも、 代の石門心学者の庶民教化の方法を見てみますと、道歌にも 歌が道歌の中心であることは否定しません。しかし、江戸時 すが、そのように言う方も中にはおられます。もちろん、和 部道歌だというふうに考えていいんだと(笑)。少し極端で ある人に言わせれば、それこそ「どうか」なあ、 道歌というのはどこまでを言うのかが非常に難しく、 いわゆる俗謡といいますか、 非常に語呂のいい と思えば全

けです。どう定義したらいい あながち間違いじゃないのかなと思ったりするときもあるわ 万葉の時代から、大和人が詠んだ歌は全て道歌だと言っても ろいろなものまで道歌と言っていいとなると、それこそ記紀 俳句や発句、連歌や連句、そういったものも入り得ます。 し幅広く、広義的にとらえれば道歌というのは七五調のもの、 のかは、非常に悩むところでは

神儒仏道この身のことよ」ではじまり、 有隣の『心学和合歌』ですが、「心ひとつをしりえてみれば 年に書かれた神道的傾向が強いと言われた石門心学者の大島 ご参考までに史料を若干持ってきました。これは文化十一 一道はひとつでをし

七五調

用した、そういったものも広い意味では道歌です。つまり少 で非常にテンポがいいです。耳に心地よく感じる七五調を利 味を込めた「和合歌」などがあります。そういう歌は

へは のつゆに、 も目出たや和合のとくは、天下太平万々年も」と締めていま 神も仏もめぐませたまひ、子孫長久うたがひなひぞ、げに わかる、 草は青みて桜まづひらく」、 神と仏とふたつはなひよ、春のあしたのめぐみ 中略しまして最後に

口調が良いのがわかります。

ういうものはやはり七五調で語呂がいいんですね。こういう 子もりも仏のくらゐ、皆倶成仏目出たけれ」三十一文字だけ びにあらたに日に日にうたへ、念仏題目こもりの歌よ、釈迦 ずさむものです。さほど高度なものではありませんが、庶民 ものも広い意味の、 も阿弥陀も手を引きたまひ、往て生れて蓮のうてな、ついに かしれねどよそではないぞ、母の胎内やどりよりも、 庵義観の『子守歌』です。子守をしながら歌うというか、 ではなくて、子守をしながら、歩きながら、歌いながら、そ ふて聞しや、うたへばよいよい、よい子になるぞ、……あり レベルでこういうものもありました。「子もりうたをばうた 次は先ほどもふれました心学者であり僧侶でもあった知真 広義的な意味で道歌と考えていいと思

> ます。 これは心学者が、どうやって道歌を通して、庶民に心の教育 リエーションといいますか、種類がこのように色々あります。 身にほかの願ひはみな栄曜」。先ほど申しましたとおり、バ よし赤子のこゝろこれぞめでたききしの松、⑦の太平楽々の をするかということに腐心をしていたことの顕れだろう思い

談実話を引きながら、面白可笑しく、笑わせ泣かせ、 われるもので、いわゆる「道の話」であり、孝子節婦談や礼 人と無縁の大衆を相手にしゃべります。これは心学道話と言 ばらばらで脈絡がありません。要は一枚一枚の紙をただまと いるのですが、これは前後に何にもつながりがなく、てんで ジとそのページ、それから次のページと、内容がつながって すが、普通の本とはちょっと違います。普通の本は、 めて一冊にしたという本です。例えば、心学者は五十人、百 これは脇坂義堂の『やしなひ草』(天明四年)という本で 心を掴

を聞いてくれたお土産として配るわけです。 て「施印」や「印施」とも呼ばれる一枚の紙です。今日、話 まり話した核心的箇所を和歌などに託した「施す印」と書 う。そこで、集まってきた聴衆にお土産を配るわけです。つ 和歌や絵で示し

すけれども、その場で話を聞くだけだと、やはり忘れてしま 形式です。心学者は、非常に話のうまい人たちではあるんで んだところでズバッと大事なことを話して聞かせるといった

ろくなこ、ろを思案でまげるまげねばまがらぬわがこ、ろ」 が、「いぢがわるふは生れはつかぬ直が元よりうまれ

最後にはこのように締めています。「むまば住

またこういうのもあります。手島堵庵の「いろは歌」です

つき、

ではじまり、

います。

挿絵と文字が混在するような形になっています。こういった 前後に脈絡がまるでなく、道歌が入って絵が入る、短冊状に を集めた本なのです。 すると、 も何回か心学講席に出てくれば、 に目に入る。これはまさに視覚教育ですね。そうじゃなくて やふすまに張っておくわけです。そうすると、ことあるごと たわかりやすい紙、 れていました。 ね。これをもらった人が家に持って帰って、 そのような徳目をどうやったら普及できるんだろうか、 一冊の本にしてあげるとかですね。非常に心配りさ 心学者が日常生活の中で正直や清浄、あるいは堪 実は、この『やしなひ草』は、そういうもの または短冊のようなものを渡すわけです 一種の施印集でしょう。ですから頁の 結構紙がたまります。そう 壁とか柱、

れに入りうるのかなとも思います。「牡丹に唐獅子、竹に虎、おばあさんなんかが口ずさんでいた、しりとり歌なんかもそお話をいただきました。そう考えてみると我々が子供の頃にいろな唱え言というか、子守歌などもその範疇に入るといういろな唱え言というか、子守歌などもその範疇は広がり、いろ

向き、

むき身はまぐり馬鹿さざえ……」と、

これはいつまで富士見西行後ろ

どもなく、

暮て戸塚に宿るらむ、

…」というように前の句

虎をとらえた和藤内、

内藤さんは下がり藤、

か江戸時代の教育のあり方を感じますね。
い江戸時代の教育のあり方を感じますね。
か江戸時代の教育のあり方を感じますね。
か江戸時代の教育のあり方を感じますね。
か江戸時代の教育のあり方を感じますね。
か江戸時代の教育のあり方を感じますね。

も続く。

それを聞いた頃は意味もほとんど判りませんでした

ろばん」が主体となっていましたが、そこに心学者がかかわらばん」が主体となっています。当時でいえば寺子屋での教育にも、やはり幼児教育といいます。当時でいえば寺子屋での教育をは、やはり幼児教育といいますか初等教育といったものもして心学者の話を聞くだけではなく、より効果的にするため、 単に聴衆と

という意味での工夫と心意気を感じることができると思い

がて越来る川崎の、軒端ならぶる神奈川は、はや程ケ谷のほこれは「時得てさくや江戸の花、なみしづかなる品川や、や『都路往来』(別名『東海道往来』)という往来物があります。

生がおっしゃったしりとり歌のことで一例をあげますと、

「往来物」なんかもこのあたりに入ってきます。今、

佐野先

っているんです。また読み書きのテキストとして活用する。

では、道歌というのはどこまで広がりを持つかということにこの手法を「文字ぐさり」と言います。もちろん、「いろはます。このように寺子屋教育の中で、いろいろな工夫がなされたり、また道歌のようなものを教材にして、皆で歌い覚えれたり、また道歌のようなものを教材にして、皆で歌い覚えれたり、また道歌のようなものを教材にして、皆で歌い覚えなせる。時代の流行に敏感というか、いわゆる流行的なものでは、道歌というのはどこまで広がりを持つかということになると、かなり幅が広がります。

宿駅を七五調の語呂の良い口ずさみを考慮して教育効果をあ

最終文字と次の句の最初の文字を同一にする手法で五十三の

た、流行・時勢という視点から、宮本先生、いかがでしょという本日の本題に戻しつつ、今の三宅先生のお話しにあっ幅広い話になっていくんですね。それでは、少し近代の御製やその手法から、「往来物」とのつながりも含めて、非常に体 野 なるほど初等教育・寺子屋教育という教育の現場

きると思います。

会始が非常に大きな影響力を持っているのですが、さらに言た。先ほど申し上げました通り、近代の和歌の興隆には、歌

今の三宅先生のお話、

大変興

、味深くお伺

61

しまし

ものがあり、代表的なものに「鉄道唱歌」をあげることが む・歌うことによっていろいろ覚えることができるといった さらに、先ほど心学の道歌の話にもでましたが、 ブームが起きるわけです。また、当時の子供たちも、 から、軍歌や新体詩は出版物としても数多く出されていて、 して、一 の調子、リズム・拍子が非常にいいからということもありま 「トコトンヤレ節」ともいいますが、行進をするのには軍歌 体詩の流行には時代的に様々な関係性があることも指摘され 行に影響を受けていることがよくいわれます。 えば明治十五年に刊行された『新体詩抄』以降の新体詩 口ずさみながら、遊んでいたということがいわれています。 ています。 にいえば軍歌の流行ということもあり、この軍歌の流行と新 般にも広がっていきます。そして、明治十九年ごろ 明治初年から、 有名な「宮さん宮さん」、これ そして、 唱歌にも読 軍歌を

仰られた通り、こうした近世以前からの和歌の基盤なしには、いることがいえると思います。まさに、さきほど武田先生がの伝統、そして道歌の流れも含めて明治の御世に継承されての伝統、そして道歌の流れも含めて明治の御世に継承されての伝統、そして道歌の流れも含めて明治の御世に継承されて五調が多い傾向があります。こうした傾向を見ますと、日本五調が多い傾向があります。こうした傾向を見ますと、日本五調が多い傾向があります。こうした近世以前からの和歌の基盤なしには、口いることがある。

歌所との関係は再考していかなければならない課題と言わざに採用したことなども含めて考えますと、いよいよ教育と御年前後から新体詩や唱歌・軍歌なども作成したこと、明治三十近代の和歌の興隆もなかったわけです。そして、御歌所の歌

て、天皇調、帝王調というものがあります。これは歴代天皇こですこし触れたいと思います。御製の歌風をいう言葉としども、その根幹にかかわる明治天皇の御製につきまして、こまた、詠進制度につきましては先ほどお話ししましたけれ

の御製にも共通していて、特に神を敬い、民を思いやる大御

るをえません

御歌所の寄人を務めた阪正臣も、御製を一言でいうと、心の大きさ、ご謙虚さなどに恐縮するほかありません。やいかにと」「草まくら旅に出でては思ふかな民のなりはひと」「世の中をおもふたびにも思ふかなわがあやまちのあり「暁のねざめしづかに思ふかなわがまつりごといかがあらむ、これがにじみ出ていると言われています。たとえば、

も巧むことあらせられず」と絶賛しており、明星派の系統にたる、御心のままの直ぐなる、さながらを咏じたまひて、毫吉も明治天皇を歌の聖、「歌聖」と称えて、「その歌調の堂々「大きいことです」と述べています。さらには、あの斎藤茂

ままの帝王調であらせられる」としています。また、明治天も泥まず、今にも流れず、堂々として、淡々として、ありのと無心と無垢との中には歌人臭も禅臭もうかがはれぬ。古に帝王の御製であり、御歌柄であらせられた」と述べ、「真率於て、まことに大空のごとく広大であらせられた。いかにも

属する北原白秋も「歌聖としての明治天皇は、その御風格に

崎が何としても世に出したいということで、お見せになられ御製を余り人に見せたくなかったのだと思います。ですが高わけですが、明治天皇はご自分の気持ちをそのまま表された

こうした経緯からしますと、明治・大正るようになったという経緯があります。

一昭

和の三

一代の宮

会始の御製は新聞にも載りましたし、社会にも広く知られるに見せたがらなかったとされています。いうまでもなくお歌皇は、ご日常のご自分のご心情を漏らされるようなお歌を人

があったのであろうと。これは、副島廣之さんの『御製・御認する、ご自戒のお歌であり、御祈りを深めるといったこと身との対話といいますか、歌を詠むことで御自身の思いを確れた大御心を忖度することは非常に恐れ多いのですが、ご自うことも考えあわせる必要があると思います。御製に込めら御製は天皇様の独白のようなものだとよく言われていたとい中に仕えて、明治神宮宮司を務められた甘露寺受長さんが、中に仕えて、明治神宮宮司を務められた甘露寺受長さんが、

歌におもう』という明治神宮崇敬会の機関誌『代々木』に掲

契機も、 誌『一 御製は、そのほとんどを高崎が点じたとされますが、御製を うになり、 共感したのではないでしょうか。特に、日露戦争以降、 「ことのはのまことのみちを月花のもてあそびとはおもはざ なりけり」を掲げて、「教育勅語の中に徳器を成就しと仰せ 育勅語の普及・実践を目指して高崎が創立した一徳会の 咸其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ」という部分に由来する、 通して広く人々が大御心を拝することができるようになった 知の事実です。明治天皇の肉声を最も伝えるものと言われる にご崩御されてから、明治天皇の御製が広く世に知られるよ そ、それが世間に出され、その大御心に触れた人々が、 非常に驚異的であると言われますが、その真剣さは、 載された文章にも同様の内容が述べてあります。 お話ししました、教育勅語の「朕爾臣民ト倶ニ拳拳服膺シテ めて御詠みになられていたのであろうと思います。だからこ らなむ」という歌があります通り、一つ一つ真剣な祈りを込 お忙しいご日常の中で、十万首という御製を残されたことは さかしきもおろかもあれど人ごとにあらまほしきはまこと それは厳粛な、 徳』の誌面に、 高崎がつくったといえるでしょう。また、先ほども 御集が編纂され、 これも注目すべきところです。 真剣な行為であったと思います。 高崎が御製・ 様々な形で出版されたことは周 御歌の謹解を載せており たとえば、 さらに言え 御製に 非常に さら 深く 御製 が機関 教

> 教育の指標とする高崎の姿勢を窺えるのではないでしょうか。 解釈しています。ここに、教育勅語と同様、 よとの御示しに外ならぬ」 られましたも、 一月)と述べるなど、高崎は御製と教育勅語とを関連づけて 畢竟此誠の徳を磨き上げて、 (『一徳』第十六号、 完全な人にな 明治天皇御製を 明治四十五.

武

田

さきほどの宮本先生のお説の通り、

日露戦争の只

種の倫理性・宗教性を帯びていたからではないでしょうか 修で、明治天皇御製を奉唱するのは、その名残でしょう。 指標として愛唱されていきました。今でも神職の講習会や研 昭和に入って、 広く世に知られるようになったのは、それ以来のことです。 た。それまでは公にされることのなかった明治天皇御製が 中、 御製がなぜ国民教化の柱となりえたかというと、それが一 高崎正風が、 明治天皇御製は、 明治天皇の御製を、 教育勅語と並ぶ国民教育の 報道機関に らしまし

の祭り主が、どういう思いを抱いているのか、 の祭り主の「祈りの歌」だからではないでしょうか。 よき生き方を求めさせてやまないような、生得の倫理性 わっているように思います。 研究者によって、小学唱歌と賛美歌の類縁性が指摘さ 御製には、 人としての姿勢を正さしめ、 それはやはり、 御製が、 何を祈ってい 我が 我が| 玉

るのか、

ということを、

御製こそが具に示しているのではな

最近、

れていますが、

いでしょうか。

見れば、それを目の当たりに拝することが出来る、と私は思 どういう思いで祭りに勤しんでいらっしゃったのか。御製を それぞれの時代の只中、祭りにおいて何を祈られていたのか。 っています。そういう意味においても、祭りと歌を切り離し 明治天皇、大正天皇、昭和天皇、今上天皇、歴代の帝は、

あさみどり澄みわたりたる大空の

て考えることはできません。

祖先からお預かりたこの国を治めていきたい、という祈りの 明治天皇の有名な御製です。澄み渡った心で、無私の心で、 広きをおのが心ともがな

守り抜いてほしい…。

心を詠われています。この御製に思いを寄せ、美智子皇后さ 次のように詠われました。

ふり仰ぐかの大空のあさみどり

かかる心と思し召しけむ

せられたのです。 こと」ならではの澄み渡った大御心、祈りの心に、思いを馳 大空をふりさけ見つつ、明治天皇が念願された「すめらみ

乗り込んできて、日本の徹底的な「アメリカ化」が図られま 昭和二十年、日本は未曽有の敗戦を迎えました。占領軍が

次は有名な昭和二十一年の歌会始の御製です。

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ

こちらの御製こそ、昭和天皇が、当時の国民へ向けて発信 松そををしき人もかくあれ

の試練を乗り越えてほしい、不屈の魂をもって日本の誇りを るではないか。国民も、松の雄々しさを鑑として、どうかこ かしかの松は、その大雪の重みに耐え、しかと立ち続けてい 目下、我が国は未曾の試練、大雪の試練に晒されている。し す。昭和天皇は、こう歌われているのではないでしょうか。 したメッセージそのものであった、と私は受けとめておりま

た意味で、一種の呪文・一種の暗号、きわめてドメスティッ リカ人らの理解を絶していたでしょう。この御製は、そうし もちろんこのお歌のメッセージは、マッカーサー始めアメ

合ってきた日本人には、たちどころにピンとくる。これこそ か。外人には意味不明でも、やまとことばで心と心を交わし クな同胞に向けた秘密のサインだったのではないでしょう

が、やまと歌ならではの働きではないでしょうか。 晩年、昭和天皇は、次のように詠われました。

遠つおやのしろしめしたる大和路の

はないでしょうか。戦後、 この御製は、自らのご生涯を顧みられたお歌でもあるので 我が国は、憲法やら何やら、 歴史をしのびけふも旅ゆく

アメ

ーツ・日本の根っこは、なつかしいふるさと、大和にこそ淵リカンな仕来りを受け入れてきたけれども、やはり皇室のル

歴とご自身のご生涯を重ねあわせて詠われた絶唱と拝されこそ、日本人の不易のしるべなのだ…。まさに近代日本の来

源している。大和の遠つおやたちがお示しになられた生き方

こから我々は、皇室の何たるか、日本の何たるかについて、た国民への痛切な思いが、しっかりと籠められています。そこのように、天皇御製には、祭り主としての祈りの心、まます。

無限の示唆を汲み取ることができるのではないでしょうか。

あの地震の後で、「平成の玉音放送」と呼ばれたあの陛下の佐 野 今年は、東日本大震災からちょうど二年目です。

テレビ画面にお出になられてのお言葉の中で、「雄々しさ」

ます。そういう、大御心の中にずっとつながってくる伝統といる論評が、私の目に触れる中でも幾つかあったように思い「雄々しさ」と震災を受けた人々の態度と結びつけて語ってという言葉が出てきました。今の「松そををしき」の歌の

たというお話を、今、武田先生がされましたが、これは言っそれと、明治天皇の御製を拝して皇后陛下が御歌を詠まれいわゆるコメントの中に現れてくるんだろうと思います。

います。

いわば動かす主体こそ帝王であるという、そういう

いうのは、

御製、

御歌だけでなくて、陛下の会見でのお言葉、

といっても、

後鳥羽院と後醍醐天皇とは、その政治的状況

解釈をしています。

つ

かり吹き続けろというような、

また御製には、帝王調・天皇調というものがあると、明治なということも感じました。

でいく、そういうようなところも見て取ることができるのかっていますが、この本歌取りをすることによって心をつない

のは、少し昔風な技法で、

近代和歌の中では余りやらなくな

本歌取りというも

てみれば本歌取りになるのかと思います。

こそは所島守よ隠伎の毎の荒き皮虱心して吹け」というお歌たが、先ほど触れました丸谷才一の本の中、後鳥羽院の「我の高崎正風がそう言ったというお話が、宮本先生がされまし

いずれは島から脱出して悪賊どもを平らげるまで、むしろしをどう解釈するかという箇所がります。「あらき波かぜ心しをどう解釈するかという箇所がります。「あらき波かぜ心しているのだ。むしろ、我が命令に従って堂々と心して吹けと。のではない。我こそは帝王として、波風に対しても命令をしのではない。我こそは帝王として、波風に対しても命令をしているのだ。むしろ、我が命令に従って堂々と心して吹け」というお歌こそは新島守よ隠岐の海の荒き波風心して吹け」というお歌

仮名序でも、やまと歌が天地をも動かすということを言っていうものを大きく感じることができるのかなとも思います。らして、ちょっと特殊かもしれませんが、そこには帝王調と

供に生かされているということのありがたさにつながってく 中から感じることが出来るのではないでしょうか。私たちは 国民とのつながりの中にどうあるのか、またどうつながって るのではないかというのが、私の基本的な思いです。それが、 心 意気といいましょうか、 大きさというようなものを御製 0

れて欲しいというような話題とかは特にありますか。 このあたりで、 この座談会を企画した事務局の方から、

触

ではないのかと思います。

いくだろうかを、

意識していきたいと思います。

事務局 割はやはり大きい意味を持っているということが、これ 陛下と国民とのつながりの中で、 御製の果たす役 まで

北から南まで等しく国民が参加できるようなお題が特に選ば として、 のお話で改めて実感しました。 ついて、 歌会始の重要性も改めて感じました。その歌会始に 宮本先生から昭和二十一年以降のお題につい また、その御製が表される場 いては、

始まった時点で、広く身分を問わず詠進が国民の中に広まっ 意味があった思いますが、 こぞって参加できる状況・素地があったということでは ていたということは、その時点でもう既に、 それに先立ち明治七年にご詠 歌会始に国民が 進が

れたように、 でしょうか。

歌作り自体は古代、

さらには神代からの伝統で

見

「国褒め」

の話も出ました。

陛下は行幸されるたびに

先ほどから武田先生も三宅先生もおっしゃっら

れるようになったというお話がありました。

これにも大きな

ように、

かなと思います。

いかに受容し解釈したかというのが次の問題になってくるの

ろをあらはわむみもすそ川の清き流れに」という御製がある

何か発信されるようなものがあって、

我々は

にここ

参加するということであれば、 が近代においても引き継がれたわけです。また、 育の成果自体を現すものでないのかと思い において爆発的に国内に広がった。 て、等しく国民に教育を受けさしむる一つの方途であったの これはまさに教育の問題とし これはまさに、 ます。 そしてそれ 国民等しく

あり、万葉の伝統であり、それが一旦中絶したとしても近世

また、 御製を如何に解釈するかは非常に難しいことであ

して発した言葉なのかもしれませんが、「国民もつね を持つのだと思います。もしかすると、 れた時点で、 るというお話がありました。 に見せるための歌ではなかった、 天皇の御製は陛下が自らに発せられたお言葉自体であり、 と思うのですが、先ほどからからありますように 我々は陛下のお言葉として、お諭しとして意味 しかしそれはもう既に外に表さ みずからの心との対話であ 陛下自身が自 特に明治

といったものも出てくるのかなと思います。 そこで、一つ興味 深 いと思ったのが ありまして。 先ほど、「国 御製

その土地その土地にお歌を残して、 それを敬仰する形で 御

ます。 あります。 の川こひぞつもりて淵となりける」 というものがつくられているところもあろうかと思 それ以外にも歌枕として名高い土地にまつわる和 例えば、 陽成院の「つくばねの峰よりおつるみな の歌なんですけ れども、 歌 1/2

これが筑波山の山頂に御製碑が建っています。

陽成院が筑波

Ξ

でも、

山に行幸されたことはなく、歌枕として知っていた。

製というものもあるかと思います。そういった、 示しいただくものとしてどのように受容されていったの す。また、 その土地にまつわる歌を詠まれた。それが今、「御製碑」 です。こういった土地との結びつき、その土地に下され は実際にお出ましになられ その土地を陛下が讃えたということで建碑されてい 先ほど「最上川の歌」のお話がありました。 て、 その時の様子を詠われたもの 陛下からお これ かと いる御 ٤ ま

また皇后の御歌、 ば、武家の歌も、 いたかと思います。そしたときに、 あげられ分類をされていますが、 そこに意味があったかと思うのですが、 道 微に関 公家の歌もあり、 中でも壇林皇后の御歌などかなり使われて しましても 『和論語』 またご歴代の天皇の御製 そこには神祇の歌もあれ なぜその歌が出てくるの の中で数多くの その御製を如何 和 歌

ます。

いうのが、もしご意見がありましたらお伺いできればと思い

うのですが に解釈してい つ たのか方向でも、 お話をお聞きできればと思

ら受けていました。しかし俗書であっても、 『和論語』は、来歴の正しくない俗書だという指摘も当 をどう評価するかは、 宅 石門心学の中でも、 ちょっと難しい点があります。 石田梅岩が重視した『和論語』 社会の庶民にと 蒔

心学も組織的になってきて、 ころが、次の代といいますか、手島堵庵の時代になると石門 姿勢で、 論語』は一切排除されていくというような方向へだんだん変 って必要なよいものである限りは、 梅岩はこの『和論語』を頻繁に活用しています。 教化方法も整理され、この それを利 用しようとい

す。もちろん三社託宣などとも深く係ってくるのですが、 したが、 語』を用いたという梅岩の発想そのものは、 また今、仰られたように、たくさんの和歌が収録されていま 庶民教育という視点からいうと非常に意味があり、 先ほども触れ 神

わっていきます。しかし、石門心学の一番初期の頃、

『和論

はもちろん三十一文字ですが、どんどんバリエーションが増 して利用しようという発想ですね。だからこそ道歌も、 要なものであり、 えてくるのです。そういう一つの基になっているんじゃない よいものは取り入れ、 磨種 (とぎぐさ)と 儒仏道を始め、

ありとあらゆるものはすべて庶民にとって必

すが、今お話が出ましたので、そのことにも触れてみました。 先ほども申し上げましたように、道歌の定義は難しい 話を道歌のほうに引き寄せて、話をしたいと思い ま で

かと感じました。先ほど、『和論語』の話もしたかったので

片歌など、 べて三十一文字の短歌である。歌の形式には長歌や旋頭歌 談』という本には、こんなことが書いてあります。 いろと種類があるけれども、 少し古い本ですが、 短歌よりも字数が多いものや少ないものや、 八波則吉という方が書いた 道歌はす 『道歌清 いろ

いかと、 石門心学の庶民教育の手法の中心は何といっても心学道 私はちょっと異論を唱えております。 それはかなり狭義的で、もう少し広く捉えてもいいのではな

ますが、石門心学という思想史を扱っている立場で言うと、

限定的にはっきり言っておられます。そういう説もあり

エーションがあります。

道歌はすべて短歌だというふう

録されており、 名な柴田鳩翁の す。そういう心学道話の中でも、 などでざっと分類分けをしてみたことがあるのですが、 っても、 翁道話』は一八七首ありますし、 でしょう。今でも読み物としても非常におもしろいと思い 一二五首、 五〇〇首を越えます。 奥田頼杖の『道の話』は一〇二首、 『鳩翁道話』は七三首と、数多くの道歌が収 わゆる人口に膾炙されている道話四つをと それを用途やその意味、 たとえば中沢道二の 布施松翁の『松翁道 そして一番有 話 道二 頭が 形態 ŧ

わるんですよ、

というふうに話されれば、

立派な道歌になっ

それは本歌取りなのか、そうではないのか、ものすごくバリ その心学者が詠んだのか、あるいは以前 いったい誰が詠んだのかよく判らないものも多くあります。 使しています。また先ほど本歌取りという表現も出ましたが ドンと持ってきて、そこから話が始まるなど、 まとめとして集約する道歌、 話の席で色々な使われ方をしているんですね。 ぐちゃぐちゃになりそうなくらい混乱しました。 の区切り区切りのまとめとして使われた道歌、 あるいは逆に主題として短歌を の方が詠んだものか 縦横無尽に駆 席の全部 つの道話 道歌 は、 渞

ば、 けれども、だんだん成長して人格を磨き立派な社会人になれ 子供の頃は腕白小僧、鼻垂れ小僧で、 ころで」という言葉で話を繋げ、「人も同じようで」と続け、 しょう。 ぞれの本来の花の色を見せて変わりとても美しい」となるで し秋は色々の花にぞありける」こんな歌があります。 でみな同じように見えるけれども、だんだん秋になればそれ 国文学的な解釈だと、まさに花鳥風月をめでた歌として、 春は新緑のころはいろいろな草花が、あたり一 たとえば、『古今集』に「みどりなるひとつ草とぞ春はみ それぞれの地位も名誉もできて、立派な人間になって変 道話席ではそれを比喩的に捉えて解釈します。「と みんな同じようである 面 通常の

でも五○○首以上あるわけですが、一体どういうパターンがてしまいます。そういったものも含めて有名な道話四つだけ

あるのかと、

短歌だけでも仮に分けてみました。読んで誰も

いま言いました花鳥風月に託しなぞらえた「日本古典型」や歌もあれば、ちょっとおもしろい狂歌・川柳に近い「狂歌型」、がわかるような、平易な言葉で教えるという「教化型」の道

ら、ましてや七五調のものにまで広がると、これは手がつけが何だか判らなくなってきまして、短歌だけでもこうですかり、分類するのに非常に苦心しました。やっているうちに何「本歌取り型」もあれば、これらを複合的に使ったものもあ

られなくなるかもしれません。

でも、だからこそ、教育の中で、庶民教育の中で、かなり

があったのだろうと思います。近代の歌というものを考えたう素地というか、ベーシックな部分には心学者の活躍、功績たのは、もちろん心学者の影響だけではないですが、そういになっても、御製に引きつけるわけるではないですけれども、の定着が見られたのではないかと思います。だからこそ近代の定着が見られたのではないかと思います。だからこそ近代

でもいうのでしょうか。近世において歌の中から何を読み取佐 野 プラグインとしての近世の和歌を活用した教育と

なく感じるところではあります。

やはり近世の教育が重要だというところは間違い

の中にあったんだろうということでしょうか。
ました歌会にも、そこに参加し得る、そういった因が、近世であろうという感じでしょうか。今日の話の流れにも出てきは、伝統的にそこに植えつけられて、開花したのが明治以降るか、高尚な文学論ではなくて、一般的に簡単に、「お諭し」、

門心学の典型的な手法であり、どなたも指摘されている点でていただくと、今、道話と道歌の話をしましたが、これは石三 宅 そう思います。もう一つ、つけ加えさせて言わせ

という側面があります。どうやって心学者になるのか。ただ、に、その教える側、石門心学者はどうやって修行をするのか活教訓的な教えが基本です。それは本質の一つですが、同時大衆に対して倫理・道徳を中心に庶民教育をするという、生

「やりたい」と手を挙げてなれるわけではありません。人の

入れられているのですが、ここが意外に語られていません。門心学者となる人の修行方法の中には、道歌が徹底的に取りに心を練るなどの修行方法があるはずです。つまり、この石前でしっかりいろいろと話をするためには、やはりそれなり

石門心学というと石田梅岩や手島堵庵、

中沢道二が有名で

私は思っています。これはですね。心学というのは、

す。ただ、意外に忘れている、もう一つ重要な側面があると、

そういう人たちとのやりとりがかなり活字になっておりまし心学の修行をやっています。石田梅岩の語録などを見ますと、商人のご主人はもちろん、奥さんも梅岩の直接の弟子として直接の弟子でありません。直接の弟子は他にも沢山います。すが、時代的にはかなり飛んでいまして、手島堵庵は梅岩のすが、時代的にはかなり飛んでいまして、手島堵庵は梅岩の

返すのです。心の底からの言葉、自分の心の中を詠んだ短歌それを、弟子の商家の主人や奥さんが一緒になって、道歌でまして、先生である梅岩がある一定の問題を道歌で出します。て、そのやりとりは、道歌でやっているんです。策問と言い

で返すのです。それをまた、先生である梅岩が、それを見て

なっていく。そういう機能が道歌にはありました。をはかっていくという形式です。それを積み重ねて心学者にとりで、心の段階、精神的な、いわゆる境涯を、そのレベルここはこうだといって添削するのです。そういう道歌のやり

兵衛の道歌「くみて見よいかにつきせんいつみなるこゝろの兵衛の道歌「くみて見よいかにつきせんいつみなるこゝろの十一屋伝兵衛こと富岡以直、この人は富岡鉄斎の先祖にあたる人ですが、「世におもき病なれどもとく薬にあたればこそる人ですが、「世におもき病なれどもとく薬にあたればこそる人ですが、「世におもき病なれどもとく薬にあたればこそる人ですが、「世におもき病なれどもとく薬にあたればこそる人ですが、「世におもき病なれどもとく薬にあたればこそをここでご紹介しましょう。「毒薬を薬とこそは君やさぞは極岩と直染了

うでもありますが、まさに心学の本質である心の内味、 れはおてんなりけり、おてん様」これなど何やら禅問答のよ ります。「口上、おてんとて人は知れ共我しらすおてんと知 屋平兵衛の妻てんに宛てた書簡のなかにこのような道歌もあ は「ふたつなき心が水ににたるかやおなし心ににせやしぬら おなし心になかれぬるかな」と歌を詠んだのに対しても梅岩 平兵衛の家の女中しげ女も「ふたつなき心は水のことににて やと疑とめのこころ」と丁寧に指導しています。 ふの日と思ふ心もそらにきゆるやーぬる心少しの残るゆへに もそらにきゑぬる」に対しては「ひと年をすきてはやきは 兵衛の妻てんの「ひと年をすきてはやきはけふの日と思ふ心 こけ清水こゝろのおくもほらぬ山の井」と直 おくのほらぬ山の井」に対して「くみて見よいかにつきせん る側も、どちらも歌詠みのいわゆるプロではありません。 に関する道歌と見てよいでしょう。歌を詠む者も添削指導す ん」と添削指導しているのです。 ついでに申しますと、 したり、 その影響か

なところだと思っています。る。そういう機能が余り語られていません。実はそれが大事る。そういう機能が余り語られていません。実はそれが大事「あなたの心の内味はどの程度だ」というのを道歌で確認す

正直や清浄や誠とか、

堪忍とかの徳目普及だけではなくて

こがすごいと思い

道歌

の機能というのは、

無縁の

大衆庶民に、

平俗卑近な、

プということが、明治以降に花咲いてくる要因の一つかな、すが、そういう庶民における一定のレベル向上、ボトムアッり江戸中期以降です。識字力の問題とも関連してくるわけでが載るような有名な人ではなくて、まさに商家のご主人や奥が載るような有名な人ではなくて、まさに商家のご主人や奥が載るような有名な人ではなくて、まさに商家のご主人や奥

地域の庶民がなんらかの学者や歌人などと師弟関係を持ってのですよね。田舎の方でも、建てられた句碑や歌碑を見ても、佐 野 確かに、江戸期の庶民の知識というのはすごいも

いうことが如実に判ります。

と感じています。

弟子になっています。

ていたんじゃないかという、そんな感じもしますね。 おかります。「七重八重花は咲けども……」の話ですね。 葉があります。「七重八重花は咲けども……」の話ですね。 葉があります。「七重八重花は咲けども……」の話ですね。 養があります。「七重八重花は咲けども……」の話ですね。 養があります。「七重八重花は咲けども……」の話ですね。 養があります。「七重八重花は咲けども……」の話ですね。 養があります。「七重八重花は咲けども……」の話ですね。 養があります。「七重八重花は咲けども……」の話ですね。

門心学の会合では、正月の集まりには、必ず落語家を呼んで三 宅 近代明治期や現代でもそうなんですけれども、石

その土台にある江戸時代の教育がしっかりしていたからだとその土台にある江戸時代の教育制度が上手く展開していったのは、数育というのは本当にすごい、馬鹿にしたもんじゃないと感めています。それを見てみますと、その地域の方言で書かれめているんですね。そういったものを見ると、やはり江戸期のているんですね。そういったものを見ると、やはり江戸期のでいるんですね。そういったものを見ると、やはり江戸期のでいるんですね。そういったものを見ると、やはり江戸期のでいるんですね。その土台にある江戸時代の教育がしっかりしていたからだと

台といったものもあったはずですね。 民層がやっていますよね。そういった近代に花開く教育の土け軸を床の間に飾って、みんなが集まって和歌を詠む会を庶け軸を床の間に飾って、みんなが集まって和歌を詠む会を庶

でした。そこからもう一つ、近代の教育の中における御製のの和歌に係る教育という土台があったというのが一つの流れた御製を始めとする御歌を受容していく。そこには近世以来進などを通して国民が等しくそこに参画し、そして発表されの教話を戴きました。明治七年以降の歌会始から和歌の詠事務局 今、近世から近代への教育的なもののつながりと

感じました。 立ち位置というか役割的なものもみいだせるのではないかと

立されています。こういった、 歌をお詠いになられて、その御製を刻んだ歌碑・御製碑 などのご臨席に際して、 また、もう一つ、 陛下の行幸に際してもお詠みになられているかと思 全国植樹祭や国民体育大会、 御製の発せられる場所は歌会始だけでは 両陛下は必ずその土地にちなんだ和 現代のような行幸の際の御製 全国豊かな海づくり大会 『が建

やその御製碑の建碑の始まりというのは、

概ね明治天皇

から

したら、お聞かせいただければと思います。

うのがたくさんあったかと思います。ですが、 皇はほぼ御所から出ることがなく、国を見て回るといったこ とは非常に少なかったであろうと。その代わりといってはな お話がありましたが、 始まると考えていいのかと思います。 んですが、 歌枕的な、その地方を褒める歌 古代はともかく、 先ほど武田先生からも 近世までの歴代の天 • 国褒めの 明治天皇は御 歌とい

した。 はないかと思っいます。 所の中からお出になられて、 た同様に昭 後世に光臨されたことを記念する碑が建てられるなどもされ れた御製が碑に刻まれる。 、ます。 明治天皇の行在所跡に、 和 非常に明治天皇にまつわる建碑は非常に多く、 天皇に関しましても、 このあたり、 また、 実際に広く国見をして回られま 碑が建てられ、 直接そのときではなくても 御製碑が非常に多い 等しく国を見て回ると お詠 1/2 、になら ので

> そのあたりに関して、何か思うところ感じるところがありま 取るかということも大切なことではないかと思うのですが あろうかと思います。そういった御製からなにを如何に読み けはないと思いますが、それが果たした役割のようなものも 必ずしも教育が等しく行き渡ることを目指してということだ いうこと、 そしてそのときに下された御製について、

なじみのない人にすると、「ふうん」の一言で終わってしま た。 この最上川の歌ですが、なるほどそうなんだと感心は ければ喜びを感じ得ないものではないかと思い れその土地を歌に詠むということ、これはその土地の人でな いますが、その土地に授けられた御製、陛下がそこに行幸さ 先ほど、「最上川」 しかし極端な話ですが、違う土地に住んでいて最上川に のお話も出ましたが、 その郷 ます。 Ш

持つのかなと思うのですが。 とってまさに陛下から下された親愛のお手紙のような性格 しかし、その土地を褒め詠われた御製は、 その土地 の人に うものかとも思います。

く、 唱歌 昭和天皇が摂政宮時代に詠じた御製が、 田 の作曲者) 富山 によって作曲され、 県では、 山形県における最上 歌い継がれてきました。 岡野貞一(小学 Ш の御製 に

武

立山の空にそびゆる雄々しさに

地震ゆりし島の春ふかみつつ

御製の歌碑も、富山県の随所に建てられている習えとぞ思う御代の姿も

と仄聞しています。 「立山」の御製の歌碑も、富山県の随所に建てられている

沖縄県にお出ましになれなかったことを、

生

である。そういう思いがあったのではないでしょうか。さを讃えなければならない。それこそが天皇たるものの務めだと思います。実際にその土地に赴いて、その土地のめでた国を隈なく巡らなければならない、との使命感に発するもの国を限なく巡らなければならない、との使命感に発するもの国を限なく巡らなければならない、との使命感に発するものに表げないました。それは沖縄に対する特別の思

れがのちのち歌碑として建立されたり、歌い継がれたりしてられた際には、必ずその土地にちなんだ歌を詠まれます。そす。両陛下は、国体や海づくり大会、植樹祭でお出ましになめたたえたのが、本年の歌会始、陛下の御製であると思いまそのような先帝の悲願を体し、沖縄の風土のめでたさを褒

今上陛下は、平成十四年歌会始で、次の御製をお示しになないでしょうか。不可欠なツールとしての役割を果たしていると言えるのではいるわけです。それこそは、天皇と国民をつなぐ大切な絆、

園児らとたいさんぼくを植ゑにけり

られました。

この御製は自ずから、昭和天皇の次の御製を想起させます。と、タイサンボクを植えられた時の様子を詠まれています。淡路島にお出ましになられた際のものです。淡路島の園児ら瀬製は、阪神淡路大震災より六年を経て、皇后陛下と共に

あけぼのすぎの木はのびにけり

我が国のたちなほり来し年々に

そういう祈りの歌ではないでしょうか。していってほしい、園児らもすくすくと育っていってほしい、うか。タイサンボクの成長と共に、被災地もしっかりと復興うような、再生への祈りが籠められているのではないでしょ「たいざんぼく」の御製には、この昭和天皇御製と響きあ

にお詠みになられた、次のお歌ではないでしょうか。また皇后陛下の絶唱というべきは、平成八年の終戦記念日

海陸(うみくが)のいづへを知らず

さきほど佐野先生も言及した「みこともち歌人」額田王のの各地に留まり、なお日本の国土を守ってくださっている…。先の大戦において散華した兵隊さんたちのみ霊が、アジアーがの大戦において散華した兵隊さんたちの

は、まさに「歌の聖」とも呼ぶべき歌境の高みに達している、らべではないでしょうか。今上さまの御製、皇后さまのお歌

「熟田津出航」の歌を思わせるような、壮大無比な鎮魂のし

の思いを禁じえません。

のまま祭りの手ぶりをふるいおこすことに繋がっていることいます。我が国の歴史は、歌の道をふるいおこすことが、そと歌の道を、いま一度復興しなければならないものと念じてそういうことも含め、江戸の歴代のひそみに習って、やま

を教えています。

國學院大學神道文化学部においては、例年、作歌の課外講 國學院大學神道文化学部においては、例年、作歌の正指導を 主ながれ歌の道も極める、というかたちを模索していきたい を開講しています。 目標は、宮中歌会始への献詠です。 将 歌人で元国連大使の田中章義氏をお招きし、作歌のご指導を 歌人で元国連大使の田中章義氏をお招きし、作歌の評外講 とものと考えています。

という形で、さまざまな歌があると思います。中には、実際までの歌を詠むことができました、ぜひ神様、ご照覧あれ」がるというお話がありました。実際に各地の神社では、地元の短歌会や句会が神様に奉納する献詠という形で発表会などを開催していることもよくみられると思います。そういったを開催していることができました、ずひ神様、ご照覧あれ」が過ぎたがでいる。実際に各地の神社では、地元の短歌会や句会が神様に奉納する献詠という形で発表会などの短歌会や句会が神様に奉納する世界の神様、ご照覧あれ」を開催しているという形で、さまざまな歌があると思います。中には、実際は記述しているという形で、さまざまな歌があると思います。中には、実際は記述しているというでは、実際に各地の神様には、実際にないます。中には、実際が記述していると思います。中には、実際のを関係していると思います。中には、実際のでは、大きないると思います。中には、実際のでは、実際によいるというによりでは、大きないるというでは、大きないるというでは、大きないると思います。

で発表会などはされているのでしょうか。
にご社頭にお参りしたときの感激を歌った歌もあれば、家のにご社頭にお参りしたときの感激を歌った歌もあれば、家のにご社頭にお参りしたときの感激を歌った歌もあれば、家の

れば、 きません。できるかぎり和歌の原点に立ち返って、学生のや と」だったのです。まことに神事と和歌を切り離すことはで そ、 たいと夢見ています。そういえば、折口先生は、 を奉るような古式ゆかしい歌会型式復興の方途も探っていき ゆくゆくは大学神殿での献詠はもとより、 ています。 武 和歌の本来の姿であるとおっしゃていました。先生によ 田 和歌の起こりは、 ぜひ神道文化学部ホームページを御覧ください 和歌講座で学生の詠んだ歌は、 神に奉る「たたえごと」「い 人麻呂の御影に歌 ウェブ上で公表し 神前献詠こ わ

きたりや作法があって、何句目には何を入れてという縛りが歌と称することがあります。型式の整った連歌には一定のし連歌を行うことは、神前で法楽を施すということで、法楽連連歌を行うことは、神前で法楽を施すということが、神前で

まとごころを振るい起こしてゆきたいものと念じています。

うです。先生は折口信夫先生で、なかなかいい点はもらえなすです。先生は折口信夫先生で、なかなかいい点は、神道文化の視点からももう一度見直し、試を納については、神道文化の視点からももう一度見直し、試行錯誤しつつも再興に向けて取り組んでいくべき必要なことではないかなと思います。こういった神前での短歌や連歌の半には、からないかなと思います。こういった神前での短歌や連歌の半にないがないかなと思います。こういった神前での短歌や連歌の半には大流行しています。これが江戸時代後狂歌の連句や自由な型式のものも含めて、これが江戸時代後狂歌の連句や自由な型式のも含めて、なかなかいい点はもらえなりです。

りましたら、お願いをできればと思いますが。きたようです。最後に、これを言いのがしたということがあまだいろいろお話をうかがいたいのですが、時間が迫って

かったということを言っていましたけれども。

とめてあります。たとえば、「とこしへに民やすかれといの行された『明治天皇の御敬神』(昭和十五年)という本にま宮 本 明治天皇の御敬神にかかわる御製が神祗院から刊

代よりひとすぢの道をふむこそうれしかりけれ」、「目に見え

るなるわが世をまもれ伊勢のおほかみ」、「ちはやぶる神

- の御

ようか。

ぬ神にむかひてはぢざるは人の心のまことなりけり」などの

もちろん、神道にとってお祭り事が最も重要なものであるの神髄なのではないかというようなことを言っています。

うに、心のうぶに素直なる道というものがあり、

それ

せん。まずお祭りがあって、さらに純粋な心といいますか、復興させたということもふまえた上で、考えなければなりま歌に非常に熱心であり、戦国時代に一旦廃れた祭りと和歌を歌に非常に熱心であり、戦国時代に一旦廃れた祭りごとと和そして戦国から江戸初期にかけての歴代の帝が祭りごとと和ことはいうまでもないのですが、先ほどから武田先生が仰らことはいうまでもないのですが、先ほどから武田先生が仰ら

お歌に、いわゆる道歌と繋がるところがあるのではないでしたまほしきは心なりけり」などの御製は著名ですが、気持ちて誠の道をわけつくしてむ」、「目にみえぬ神の心に通ふこそでまほしきは心なりけり」、「ちかひたるおのが心をしをりにたまほしきは心なりけり」、「ちかひたるおのが心をしをりに

ふ時、今上天皇の、殊に戦後の御歌をよむと、その御歌には、もあるし、どうにもならぬ悲しみに沈むこともある。さういれが生きてゆく上には、理不尽な目にあって苦しみなやむ時また、夜久正雄先生は、昭和天皇御製について、「われわ

儀式というものと思われているけれども、

御製に見られるよ

自らも和歌を詠み歌集もありますが、神道といえば教えとか著名な御製がありますね。宗教学者として著名な姉崎正治は、

れられているところではないかと考えております。

祈りをお歌に込められたところというのが、神道の神髄に触

述べておられますが、やはり御製から天皇の大御心を拝する たたへられてゐるように感じられて、自分の苦しみや悲しみ づか 自分の苦しみよりももつとはげしい苦しみをへてきた人の息 が御歌の作者の大きな悲哀と苦悩とにつつまれてしまふ」 が感じられ、 自分の悲しみよりももつと深い悲しみ ع が

という受容者側の姿勢や心構えが重要であると思います。

明治天皇の御製はあくまで陛下お一人の御独り言として、

御心を知ることで、自分の思いをそこに重ねて、御製によっ 共有することによって、最も聖なる祭り主としての天皇 かさねながら、 たこと等も忖度すれば、 思いますが、さきほど触れました宗教学者の姉崎正治が述 分野における御製の受容については、今後の課題にしたいと れたり、 ご自身との対話であったかもしれませんが、受け取る側とし したのではないかと考える次第です。 ようか、 て心慰められたりするといったことがあったのではないでし やはりそれによって、明治天皇が悲しまれたり、喜ば 少なくとも私はそう考えております。 嬉しがられたり、慎まれたりと、そういった思い 御製を通して神道の神髄に触れ、 人々は日常の様々な出来事や思 具体的 大御心を拝 な教育 一の大 1/2 を を

ます。

Ξ くの道歌が縦横無尽に駆使されてきました。 宅 石門心学の講義、 講席、 また道話の中には、 当然、 その中に 数多

> たしっかり認識されていいのではないかという気がい それをしっかりと丸ごと読み取っていました。 した。敬神というような大事な徳目がその中に詠み込まれ 流の業界用語で言うなら、丸ごと捉えるということが重要で うことではなくて、歌全体で何を言っているのか、石門心学 りませんでした。ですから、文法がどうの技法がどうだとい 師や歌人といった専門家としての、 Ŕ は敬神という、 で続いています。そこで石門心学の果たした役割や評価もま のです。そういった庶民教育の営みが近世、そして近代にま 沢山の歌があります。そして、その歌そのものも、 庶民が日常生活の中で神を敬うことについ いわゆる歌のプロではあ それが-大事な たし

始めとする近代の和歌文化や教育が花開いたことも充分にう ものが土台になっていたと考えれば、 ろいろな形式を用いて教育したということです。そういった 対しても、 ではないかもしれませんが、子供に対しても、そして大人に 活躍も決して無駄ではなかったということでしょう。 なずけますし、梅岩以来、続いてきた石門心学者たちの役割 神道そのものに対しての庶民の認識は、そんなに深い 非常に大事である、大切なんだということを、 御製を中心に歌会始を į 0

これは歴代の御製史上、 田 両陛下は「相聞」 とりわけ注目すべきところではない の和歌を多く詠まれています。

武

定的に変質したのだ、と断じています。しかしながら、今上 めた、ここにおいて皇室の伝統は断ち切られ、その内実は決 小説家の丸谷才一は、近代になって皇室は恋歌を詠むのをや わし合い、お互いのまごころを交わし合ってこられました。 かと感じています。両陛下は、新婚前後から、 相聞の歌を交 しゃらなくなったら、

ではないでしょうか。 例えば、皇太子時代、陛下は、

陛下・皇后陛下は、相聞の歌を詠み交わし続け、「妹背の道」

の何たるかを、身をもって常にお示しになられておられるの

語らひを重ねゆきつつ気がつきぬ われのこころに開きたる窓

に応えるように、ご成婚の前日 というみ歌を皇后さまに贈られました。皇后さまは、これ

たまきはるいのちの旅に吾を待たす

君にまみえむ明日の喜び

もは、 育む妹背の道の大切さを、あらためて銘胆せざるをえません。 がら、夫婦の絆を固めていらっしゃるお姿を拝する時、 と詠われたのです。このような相聞のお歌を詠み交わしな 伊邪那岐命・伊邪那美命以来の妹背の道、新しい命を 私ど

先生におまとめをいただきました。

ころがありますが、そもそも日本という国は、

天皇がいらっ

天皇や皇位継承に関する規定がどうなるか、なお不透明なと

昨今、憲法や皇室典範を改正しようという動きがあります。

受けとめ、学生たちに伝えていきたいものと願っています。 をお示しになっていらっしゃる。そのことをあらためて重く 何たるかををお示しになっていらっしゃる。祭りの祈りの心 皇統を受け継ぐ天皇がいらっしゃり、御製をもって大御心の 形もなく消滅してしまうのではないでしょうか。 人の纏まりは失われ、 もうお終いではないでしょうか。 国の姿は海月なす海原に漂い出し、 神代以来の 日本

武田先生のご指摘は大切ですね。 佐 今年の皇后様の御歌に「君が春野に」と「君」 野 夫婦愛の歌を両陛下が詠まれ続けておられるという

するためにも、教育のなかでの和歌の習得は必要でしょうね。 が、無意識の中にも生きているんですね。この無意識を覚醒 詠まれることで豊穣繁栄が予祝されるという古代からの伝統 す。 明確に表現されておられるのはまさに恋歌でもあると思い 今年の歌会始の歌を切っ掛けにお話を進めていただき、各 和歌の原点に呪術と儀礼があり、正月に恋の歌を天皇が

今調、 の御製というのは、 わ高まりを見せているような歌風を感じます。古今調、新古 日本のやまと歌の伝統の中で、昭和天皇、そして今上陛下 万葉調というのではない、 帝王調といわれる歌調の中でも、 いわば昭和調というか、 ひとき 平

の

思

慨を深くさせているように思います。 成調というか、そういう趣が出ておられて、それが一層、感

た。まだ「百人一首」ができない子供は坊主めくりでした。 やるよ」と、「百人一首」を戸棚から引っ張り出してきまし になり親戚の子供たちが集まると必ず、「さあ、百人一首を ビゲームの時代になって、今の子供の遊びの中からは抜けて 伝えられていないような気もします。「百人一首」も、 江戸時代に培われた和歌に親しむ伝統というものが、あまり している人間がなるものではありません。 ておられました。召人というのは本来私のような歌を職業と 文化に志す輩として取り組むべき事柄ではないか思います。 ておられると先生方のお話がありましたが、少なくとも神道 でものこしていきたいと思います。先ほど学部の中でもやっ は言わないけれども、かなり少なくなっていると思います。 しながら和歌に親しんできた。今は、一切なくなったとまで でおこう。」とお兄ちゃんは考えたりですね。そんなことを っているのは「霧立ちのぼる」だけだから、あれは取らない できる子供の中でもまだ小さい子供がいると、「あの子が知 しまっていると思います。私たちが子供の時代には、お正月 ある雑誌に、 そういう中で、神道文化会としては、こういう伝統を少し その一方で、現代の学校を中心とした教育体制の中では、 今年の歌会始の召人であった岡野先生が仰 昔は時の大臣たち テレ

書かれていました。にも順番が回ってきてしまったと、そんな感想をある雑誌にができる人がいなくなってしまって、とうとう私のような者が召人を務め、歌を詠んだのに、今の政治家でそういうこと

に立てば、ありがたいと思います。長時間に亘り、どうもあなに広がっていくような活動に、今日の座談会が少しでも役の伝統というようなもの、いわば神道文化の一貫としてみん政治家をはじめ世俗の生活をしている者であっても、和歌

りがとうございました。

了